

多文化を  
ささえる  
人びと



# 中国人コミュニティと 日本社会をつなぐ

## 「関西華文時報」

関西地域の中国人コミュニティをささえる「関西華文時報」。東京発信型のメディアとは一線を画し、関西にこだわりつつオリジナリティ溢れる報道を通じて見えてくるものがある

大阪城に近い瀟洒なマンションの一室に、「関西華文時報」の編集部はある。在日中国人や中国に関心を持つ日本人をターゲットとする新聞である。同紙の発行人をつとめるのは黒瀬道子さん。中国の大学講師、翻訳会社の設立を経て、二〇〇二年に中国人のパートナーとともに「関西華文時報」を創刊した。

「東京発信型のメディアとは一線を画し、自分達にとって身近なニュースを取り上げるメディアをつくりたい」という思いからだった。

### 関西在住中国人に向けて

在日中国人の外国人登録者数は、在日コリアンを抜いて、ついに六〇万人を突破した。中国人コミュニティを情報面でサポートするために、数多くの中国語新聞が登場している。しかし、情報の東京一極集中のため

に、関西在住の中国人に向けたメディアは少ない。公称発行部数は月三万部。毎月一日と一五日に刊行される。発行エリアである関西・東海地域の中国人コミュニティの動向、日中関係

「関西華文時報」の表紙



中国映画界の巨匠陳凱歌(チェン・カイコー)監督が来日した際にインタビュー



主要な書店でも店頭販売されている

総領事を通じ励ましの言葉と慰問金が届けられた。これを契機に在日中国人から募金が集まったという。

### 紙面が文化交流の舞台

「関西華文時報」のもう一つの特徴は、中国語と日本語の紙面が並存していることだ。「在日中国人と日本人が仕事や生活をともにする状況が増えるなかで、中国人の動向を日本人に伝えたかった」ことが、日本語紙面を設けた理由という。逆に、日中交流に尽力している日本人のコラム

なかの かつひこ  
中野克彦  
立命館大学非常勤講師  
専門は、国際社会学、エスニック・メディア論、中国系コミュニティを中心に、文化変容とメディアの関係について研究。共著に、『移動する人びと、変容する文化』、『事典 日本多言語社会』などがある。

事や読者の寄稿を中心に、あくまで地元密着型の独自性溢れる紙面づくりを目指してきた。

### コミュニティの活性化のために

「関西華文時報」の取材対象は、国際社会で活躍する大物から一般の在日中国人までさまざまである。日中英の三言語で作詞・作曲を行なう神戸華僑五世のシンガー・ソングライター、地元のスキー大会で優勝した神戸華僑四世……。興味深いのは、地元の人びとを伝える記事が、日中間をゆるがす重大事件を抑えて第一面を飾ることも珍しくないことだ。

一般の人びとにしてみれば、自分の活動が新聞に取り上げられることは誇りであるし、励みにもなる。周りの人びとにとっても、知人にスポットライトが当たることで話題の輪が広がる。それがコミュニティの

いるといえる。

とはいえ一般的に中国語新聞のこれから考えた場合、民間企業であるがゆえに超えなければならぬハードルもある。

同紙が創刊された当時、中国語新聞の起業はひとつのブームであったが、現在は不況ということもあり、生き残っている企業は決して多くはいえない。そうしたなか、読者の情報ニーズをいかに発掘し、満たすかが課題となる。そのために「他紙にはない情報のオリジナリティにこだわっていきたい」と黒瀬さんは語る。今後も新聞のクオリティを維持し、店頭販売とともに、自主記事の多さをアピールしていくという。

地域に根差したコミュニティションを重視する「関西華文時報」の取り組みに、わたしは、中国人コミュニティの活力とともに、これからの多文化社会をささえるビジネスの可能性を感じている。



「関西華文時報」発行人の黒瀬道子さん

活性化に繋がるといえる。時に地元の中国人を伝える同紙のニュースが、中国の通信社を経て全世界に配信されることさえある。

「読者との距離の近さ」ゆえに、編集部には一般読者から悩みの声や相談が寄せられることも多い。日本で生活するうえで抱える不安や不満。そんな読者の本音にこたえるために、台湾人牧師による「人生相談コーナー」を連載し好評を博している。

一つの記事が思わぬ影響力を發揮することもある。日本に留学中の中国モンゴル族の学生が癌を患い苦境に立たされている姿を報道したところ、それが中国大使に伝わり、大阪

「関西華文時報」のもう一つの特徴は、中国語と日本語の紙面が並存していることだ。「在日中国人と日本人が仕事や生活をともにする状況が増えるなかで、中国人の動向を日本人に伝えたかった」ことが、日本語紙面を設けた理由という。逆に、日中交流に尽力している日本人のコラム

### 情報提供という「サポート」

以上から見えてくるのは、母語による新聞発行という事業が、コミュニティのサポートになり得るといふ事実である。つまり公益性と営利性の両立という意味で、「関西華文時報」はユニークな可能性を体現して